

魅力と書いて花と読む～風姿花伝から学ぶ理想の己～

国語班:山下 満里奈、西原 菜々実

要約

世阿弥の著書「風姿花伝」の花という概念から、理想の己になるために必要なものを見いだせると仮定した。風姿花伝本文からの引用に加え、当時主流だった「花実論」の考え方からも花について研究した。その結果、花は「相手の興味を引き寄せ、的確に意見などを伝えるためのものであり、魅力となるもの」であると私達は結論づけた。

1. はじめに

「風姿花伝」(以後花伝書とする)。能楽の先駆者である世阿弥が父観阿弥の教えを元に書き記したもので、能楽を学ぶ上での心得を、演者を花に例え論じている。

これを読んだ際に観客との関係、人気との関係、組織との関係を重要視しているところから、現代での人生論やビジネス論と通ずるところがあるのではないかと考えた。

先述の通り、花という概念は花伝書において演者の理想の姿とされている。そこで本研究の軸を「花」に置き、いくつかの観点から調査し、考察することで周りから求められる理想の己の実現に必要なものを探究した。

2. 研究方法

主にgoogle scholarや書籍を用いた文献調査を行った。まず、花伝書中心の調査である「調査①」を行い、花そのものの中心の調査である「調査②」を行った。

「調査①」

花伝書に着目し、花伝書での花や演者の理想像に関する記述を集めて比較した。なお、花伝書本文からの記述だが、花伝書自体がかなり古い書籍である。このことから、本文をそのまま引用するのではなく、新編日本古典文学全集「連歌論集 能楽論集 俳論集」の現代語訳等を参考にし、自分たちで解説しまとめた。

「調査②」

花に着目し、世阿弥が生きた時代の文芸の価値観で一般的であった「花実論」という考え方に視点を置き調査を行った。「花実論」については結果の項目にて解説する。

3. 結果

「調査①」

「世阿弥の言う「花」は、多くの場合、役者が観客に与える感動、と定義することができる。それは世阿弥が独自に「花」に盛り込んだ内容であった。世阿弥は生涯、観客をいかに面白がらせるか、だけに賭けた演劇人であり、その意味で彼は一生を通して「花」を追求したのであった。」(松岡,2007)

上記の引用文からもとれるように、世阿弥の言う花とは、観客が面白さ、珍しさを感じ取れるよう心身で魅せようとする「演出」である。そのため世阿弥は誰も知らないような己の芸の秘密(秘伝)を持つことを求めている。また、花は年齢を追うごとに移り変わるもので、本当に持つべきものは「時分の花」ではなく「真の花」である。

「調査②」

まず花実論について。

「文学論における花実とは、主として詩歌の成分を言い現わすために用いられる一種の比喩である。(中略)花実には後にのべるように、外観と実質、ないし形式と内容という、いわば表現的要素としての反面があり、「また両者の比重に軽重の差を認め、「先花後実」とか「花三分、実七分」などといって、花実のいずれかに比重を置いて考える場合もある。」(岩津,1954)

この考え方の場合、外観を意味する花よりもありのままの事実である実のほうが重要視される。

つづいて、花実論を調査する中で、二条良基についてのある記述があった。(二条良基は、世阿弥ともゆか

りのある人物であることが調査でわかっている。)

「ほけほけとしたしみ深く幽玄の体と、花々と花香の立てささめきたる体、簡要であるべきなり。」(二条良基、九州問答)

本来の花実論とは少し異なり、花実論の概念が根底にある中でも花も実のどちらも必要な要素であり花の重要性も述べていることとなる。

そして我々の調査では、花伝書内で実という言葉が花実論における意味で使われた箇所は一度も無かった。それに対して、花という言葉は実に100回以上使われていることが分かった。

4. 考察

まず《調査①》から、世阿弥は「観客をいかに面白がらせるか」を常に考え、尚且つ観客への「感動」を与えることにも成功している。

《調査②》から、花実論から二条良基、そして世阿弥と、花への考え方が変わっていることがわかった。このことから、花実論と世阿弥には少なからず関わりがあるのでは無いかと考えた。

実についての言及こそなかったが、世阿弥は内容の重要性を否定してはいない。それどころか、《調査①》で分かるように、「内容」を伝えることによる「観客の感動」を生んでいる。《調査②》から、世阿弥の「花」についての考えから完全に花実論の「実」が失われたとは考えづらい。

従来の花実論に当てはめると、「観客をいかに面白がらせるか」は「花」である。また、「観客への感動」は「内容、本質が相手に届いたことによる心の動き」と捉えると、「実」と考えることが出来る。つまり、世阿弥は「花」という演出の中で「花から実へ」という流れを全て行ってしまったのではないだろうか。

「花実には(中略)それとこれとは絡み合っていて截然と分かちにくい場合もある」(岩津.1954)

という記述も見られることから、花実論には元から2つを完全に分かちきれていなかったことが推察される。よって世阿弥は、二条良基からのプロセスによって、元から曖昧であった花と実の境目を完全に取り払い、一体化させたのではないか。

つまり、世阿弥の「花」は、観客を惹きつける魅力(表現の仕方)によって観客の意識を向けさせることで、その心を伝えようとする一連の流れであると考察した。

5. 結論

花の四季折々に咲いたり変化し、新鮮な感動を与える性質から世阿弥の論ずる花とは、自分の演技に対して相手を惹きつけるための魅力であり、その心を伝えるために必要不可欠なものである。また、その舞台の状況を把握、対応し、相手の心と役者の演技が一体化することで花は輝くのである。

これは現代でも同じことが言える。理想の己とは、「相手の興味関心を引き、いかにして相手に意見や考えを的確に、かつ簡潔に伝えるか」という能力に長けていることを言うのではないだろうか。本研究の主題であった「周りから求められる理想の己の実現に必要なもの」については、この能力がそれに該当すると結論づけた。

自分の持つ花の魅力をうまく工夫して見せることにより、人を惹きつけ、自分の意見や主張を伝えられる。そういう能力(花の会得)を持つ人はこのビジネス社会の中、多くの場面で力を発揮し、求められるだろう。今回の研究では理想の己になるための具体的な方法についての研究が行えなかったもので、引き続き花についての解釈を進め、明らかにしていきたい。

6. 参考文献ならびに参考Webページ

新編日本古典文学全集「連歌論集 能楽論集 俳論集」小学館

金忠永(2001)『風姿花伝』における花:その開花の条件を巡って」文学研究論集

松岡心平(1997)「世阿弥の花—花から風へ」國文學 解釈と教材の研究 平成九年四月号

松岡心平(2007)「花の時代の演出家たち」ZEAMI4号

岩下紀之(2012)「連歌史の諸問題」に対する岸田依子の書評

岩津資雄(1954)「花実論—歌論史研究序説—」國文學研究